

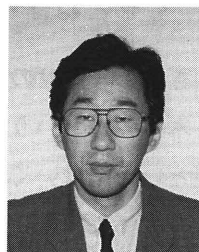
高卒者のキャリア形成から見た専門高校における進路指導の課題

吉本, 圭一
九州大学教育学部助教授

<https://hdl.handle.net/2324/18636>

出版情報：産業教育. 47 (10), pp.8-11, 1997-10-10. 文部省職業教育研究課
バージョン：
権利関係：

高卒者のキャリア形成から 見た専門高校における 進路指導の課題



九州大学教育学部 助教授 吉本圭一

1 はじめに

この小論では、高卒後の進路、キャリア形成の面から、専門高校のこれまでとこれからを考えてみようと思う。学校教育法は、新制高校教育の理念を「高等普通教育及び専門教育」と規定した。この「及び」をどう解釈するのか、今日に至るまで様々な議論があった。専門学科は、いま文字通り両者を教えている。しかし、この「及び」の両者の教育を提供することが生徒にどんな「影響」、「効果」を与えるかについて、教育関係者の間でどれほど真剣に、かつ実証的に検討されてきたのだろうか。

1960年代から高度成長期にかけて高校全入運動を展開した日教組は、産業界の要請に従属する職業科拡充に無条件で反対し、産業界も結局のところ「卒業者のレベル」といった見方で職業科よりも普通科の方を重視する採用を行ってきた。そして、それらを科学的に分析するはずの教育社会学者の多くも、「学歴主義研究」だけに目を奪われてしまっていた。

高校教育が準義務化し、専門学科からも高等教育進学など多様な進路が開けてきた今日、原点に戻って高校教育の「及び」に関する効果を実証的に検討すべき時が、再びきているのではないだろうか。筆者の仮説を手短に述べておけば、以下の通りである。「高等普通教育及び専門教育」の効用は、それぞれの専門分野の技術習得という直接的な意義だけでなく、むしろ生徒たちが職業的な価値観や関心を形成し、発達させるという間接的ではあるが、本来的な教育的な意味、あるいは職業的な社会化に求められるのではないだろうか。すなわち、今日必要とされるのは、人生80年時代における長期的なキャリアと生活を自ら主体的に選択していく能力である。この点は、まさに進路指導の課題につながる。

若干のデータを見よう。

2 多様な進路を可能とする専門学科

(1) 進学ルートとしての専門高校

戦後の教育拡大は急速であり、高校教育はこの間に大きく「機能」を変えた。表1

表1 各コーホート別の進路推計 (中卒年基準)

(%)

			中学校卒業年	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1991
高校進学	専門学科 卒業	高等教育進学	2.6	5.3	6.0	5.0	5.4	6.5	7.1	
		就職	22.9	25.0	22.4	19.9	16.7	14.7	13.9	
		不明	1.7	2.4	2.4	1.7	1.6	1.2	1.6	

	中退			2.0	2.0	2.5	2.9	2.5	2.4	2.2

普通科	卒業	高等教育進学	19.4	28.6	38.2	41.5	44.4	49.1	50.6	
		就職	16.5	14.1	14.0	15.6	14.0	12.3	10.8	
		不明	4.8	4.1	4.9	4.5	5.7	4.7	5.1	

	中退			2.2	1.4	2.3	3.4	3.8	3.5	3.2

高専進学			0.3	0.6	0.6	0.5	0.5	0.6	0.6	
高校等・非進学			27.7	16.5	6.6	5.0	5.4	5.0	4.8	
中卒者計			構成比	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	99.9
			実数	2,359,558	1,667,064	1,580,495	1,723,025	1,882,034	1,981,503	1,860,300

注) ① 中学校卒業年を基準として、卒業者に対するそれぞれ標準的な年数での進学者や就職者を統計より把握し、それらの差をもとに中退者、不明者を推計

② 高等教育進学者は、現役・1浪・2浪以上の大学と短大、および現役の専門学校(出所) 文部省「学校基本調査報告書」各年版

は、1965年から以後の中卒コーホートが、普通科や専門学科などの高校教育を経て最終的にどう高等教育に進学したのか、就職したのかを推計したものである。

1965年には、コーホートの4分の1強にあたる27.7%が中卒で社会に出ていた。同コーホートの22.9%は職業科を卒業して就職し、16.5%は普通科を卒業して就職した。どちらの学科も、完成教育「機能」を果たしており、さらに普通科は「進学準備機能」を併せもっていた。

その後高校非進学が減少し、普通科から高等教育進学者が増加した。普通科は徐々に進学準備に特化し、専門学科はむしろ多様な機能を有するようになった。今日の専門学科は、1960年前後の普通科よりも高い高等教育進学率を有しているのである。

読者の皆さんに注目してもらいたいのは、こうした進路のメイントレンドの陰にある、高卒後の進路不明者と、高校中退者である。専門学科で「中退」が多いことは

しばしば「問題」にされる。しかし、普通科からの卒業後進路「不明」者数も同じように「問題」ではないだろうか。この「不明」とは、高等教育進学者と就職者との差である。つまり、新規学卒として就職してもおらず、最終的に高等教育機関に到達していない高卒者数である。この進学と就職のはざまに残された者も、「10万人の高校中退」と同規模であり、それは普通科卒業者に多い。進学へのアスピレーションを持ったけれども、浪人等を含めても最終的に進学までたどり着かず、いずれかの時期に就職していったものと推測される。高卒での「新卒就職者数」が減少している今日、この「中途就業」の問題は、普通科から職業への移行において無視し得ない。

(2) キャリアの出発点としての専門高校

高校からキャリアへの移行の円滑さについて、さらに日本労働研究機構の高卒者の初期キャリアに関する調査結果をみよう(日本労働研究機構、1966、「高卒者の初期

キャリア形成と高等教育』参照)。

表2のように、まずサンプルの高卒就業者614名の職歴の開始時期をみると、卒業年の4月までの就職者、いわゆる「新規高卒就職」者が90.0%にのぼる。他方、卒業年の5月から高卒6年目の12月までに職歴を開始した「中途就業」者は8.5%である。属性別には、「中途就業」は、商業科では4.6%、工業科では5.4%にとどまっているのに対して、普通科では24.8%と顕著な開きがある。特に普通科の場合、男子では中途就業者の比率が30.6%に達し、女子でも20.3%ある。普通科における高卒後の「中途就業者」の規模は、職業科のそれよりもはるかに大きい。

第二に、高卒後5年8か月間で「パート」、「アルバイト」、「臨時」、「派遣」などの正規の職員以外で働いた「非正規就業経験」者が19.7%いる。就職時期別には「新規高卒就職者」で17.0%に対して、「中途就業者」では42.3%と半数近くに上がっている。属性別には、女子で多く男子で少ない傾向にあるとともに、家庭科で多く、工業科で少ないという学科間の差もある。

第三に、定着—離職について、対象全体では卒業後6年目までに「離職経験」のあるものが53.2%に達しており、工業科男子では42.7%、商業科男子では43.6%にとどまっているのに対して、女子および普通科で高い比率になっている。

(3) 普通科における進路準備機能の低下

初期キャリアへの移行についてまとめて

表2 学科別・性別の高卒6年目までの初期キャリア形成
%, (カッコ内は、母数)

	①中途就業者 の比率	②新卒就業者 中の非正規 就業経験者 比率	③新卒就業者 中の初職を 離職した者 の比率
学科計	8.5 (614)	19.7 (553)	53.2 (553)
うち男	11.3 (292)	15.1 (252)	44.0 (252)
うち女	5.9 (322)	23.6 (301)	60.8 (301)
工業科	5.4 (186)	11.2 (170)	43.5 (170)
うち男	5.6 (180)	11.0 (164)	42.7 (164)
商業科	4.6 (281)	22.8 (267)	55.8 (267)
うち男	12.7 (63)	23.6 (55)	43.6 (55)
うち女	2.3 (218)	22.6 (212)	59.0 (212)
家庭科 (計=女)	2.9 (34)	31.3 (32)	71.9 (32)
普通科	24.8 (113)	22.6 (84)	57.1 (84)
うち男	30.6 (49)	21.2 (33)	51.5 (33)
うち女	20.3 (64)	23.5 (51)	60.8 (51)

注) ①高校卒業後1か月以上して就職した者の比率

②高校卒業1か月以内で就職した者のうち、パート・アルバイト・臨時などの就業形態を経験したことのある者(就業期間5年8か月)

③高校卒業1か月以内で就職した者のうち、最初の職業を離職した者(高卒後5年8か月の中で)

資料出所：日本労働研究機構「高卒者の初期キャリア形成」(1996)

みると、どの指標においても、普通科で進路への移行に問題が多く、工業科卒業男子で多くが学卒時に就業先を見つけ安定した初期キャリアを積み上げている。

普通科では、「中途就業」など職業への移行時の困難を経験する若者が職業科よりも多くいる。しかも中途就業は、非正規就業や離職の経験とも関係しており、その後のキャリア形成の機会において困難が大きい。普通科から卒業時に直接就職する者の数が少なくなればなるほど、こうした「中途就業者」は無視しえなくなってくる。肝心なことは、普通科では、在学中の学習および進路選択のための活動において、なんらの職業生活への準備も行われていない可能性が大きいことである。普通科における

進学を第一目標とする進路指導において職業への指導が弛緩した状態にあることも、この問題を増幅している。

これに対して、専門高校における「高等普通教育及び専門教育」は、高等教育進学への道も次第に開かれるとともに、「職業への移行」という本来の機能において、安定した初期キャリアへ導くという意味で、単に「就職」という一時点に留まらない「効果」を発揮しているのである。

3 専門高校の進路指導を 一層充実させるための課題

まとめると、専門高校において「高等普通教育および専門教育」を施していることは、今日の多様なキャリア形成への準備として有効に機能している。

専門高校は、「スペシャリストへの道」としての基礎・基本である。このとらえ方は、その延長に、応用・発展、ないし完成といった次の段階を想定している。進路指導において、生徒たちが専門高校での学習をいかに発展させて、スペシャリストへと成長していくための進路を模索していくか、またそれをどう指導していくのか。

すなわち、就職するにしても、それぞれの職場での技術革新のスピードは早く、また企業の雇用システムの変化も進行しつつある。もはや、「密度の濃い」職業教育を高校段階で経験したとしても、それだけで長い職業生涯をわたっていける領域は限られている。たとえば、昨今の情報処理やマルチメディアについても、いま最新のテクノ

ロジーを導入して教えても、その技術の寿命は他の技術と同様に、あるいはそれ以上に短いものであろう。これまで以上に、就業後の学習の積み重ねや職業的な能力開発が重要になっている。そのため「基礎・基本」が重要になってくる。こうした単に「就職」という接点にとどまらず、キャリア形成という連続をとらえ、基礎と展開の関係を考えながら指導していくことが大切なのではないだろうか。

大学や短大、専門学校へ進学する場合には、まさに高校は基礎・基本であり、上級学校がその応用・深化である。それでは、どのような専門高校の学習とどのようなタイプの高等教育機関・専門分野の組み合わせが、基礎・基本と応用・深化という面からみて整合的な組み合わせになるのか、検討していく必要がある。

もちろん、どのような大学、短大が推薦入学を実施しているかといった、情報収集、合格可能性の検討といった「接点」としての進学対策も欠かせない。しかし、それだけでなく、高等教育を修了してその先にどんな職業キャリアを形成できるのか、そのキャリアは専門高校で学習したことをどのように活かしたものであるのか。そうした実態を把握し、そのうえで、専門学科と進学先の専門性との整合性、あるいは接続性（articulation）を高めていくための方策を検討していくことが今一番求められているのではないだろうか。